様々な書く材料と「であい」
自ら書く材料を選べる書き手へ
～「言葉を引用し活かす力」の育み という視点から～

2010.1（原稿は、2008.3月に執筆、2009.12 加筆）

1.はじめに
～２００７年度川崎市立鷺沼小学校４年１組の実践を中心に～

子ども達と毎日顔を合わせる中で、相手や場に応じて即時的に話を返したり、印象深い言葉を大切に引用したりしながら、相手と対話できる大人になってほしいと日々願って教壇に立ち続けてきました。また、他者と対話する前に、自分自身と対話すること、つまり想像力や理解力を働かせて、自分の考えと対峙するという習慣をつけさせたいと常々思ってきました。そのためには、書き手としての成長が必要不可欠だということもわかってきました。書く行為は、自分の思考を確認したり、自ら波紋を投げかけたりするための「内なる声を表舞台に引っ張り出す表現活動」だと思えます。そのために、悩み、躓きながら実践していることの一端をここで紹介したいと思います。実践を通して思い描く表現者、思索者としての子ども像、人間像は、『自分と対話し、他者と対話し、言葉に自分を重ね、自分に言葉を重ね、思考を練り上げようとする人』だと言えます。

そして、言語による表現力を身につけるということは、器用に言葉を操ることではなく、奥行きのある力強い言葉と出あい、それらを相手や場や目的に応じて引用しながら、**言葉のもつ力そのものに語らせるような言葉の担い手**を志向することだと思います。

2.「引用力」を中心に据えた表現力を育む教育のねらい

2.1
３つの教師の願い

「はじめに」でふれた願いを体現するためには、もう少し国語的にその「願い」を整理してみたいと思います。話したり、書いたりするためには、「材料」が必要です。その材料を選ぶということに対して、実は大変難しいと感じている児童が多いのです。目の前に「何を話したり書いたりすればいいのだろう?」という壁が立ちはだかるのです。「どのように話したり書いたりすればいいのか?」という壁よりもこれは、遥かに高い障壁だと言えます。書くことが決まれば、方法は後から必要感を帯びてくるものです。「形式」はわかっているけれど、表現すべき「内容」がないことで行き詰まるのは、「言葉の力」について考える時の大きなヒントにもなるような気がしています。この「書く内容」というのは、実は、活かしたい言葉のこと、つまり、「引用する言葉の内容」と換言すると解決の糸口が見える気がするのです。先日、詩人のアーサー・ビナードさんのコラム集を読む機会がありました。引用する言葉や逸話そのもののもつ「言葉の力」に心惹かれる魅力的な文章です。中には、文章の 80%が引用で構成されているコラムもあります。しかしながら、挿入されている逸話に読み手を惹きつける力があるからこそ２０%の意見が効果的に生きるのです。つまり、**言葉のもつ力そのものに語らせるというビナードさんの立ち位置にこそ、私たちがめざす「豊かな言葉の担い手」に近づいていくヒントが隠されていると思える**のです。 そこで今回は、「書く活動」を柱にしながら、「願い」を３つにまとめてみました。

① 様々な書く材料を通して「ものの見方」、「引用して感想や意見などを書く力」などを少しずつ育みたいです。

② 「話す・聞く」活動を、書く活動の前後に積極的に織り込むことによって、自分と他者との共通点や違いに気づかせ、書くことの内容にもそれらを取り入れながら、より豊かな書き手に成長する意識を持たせたいです。

③ そして、人から提示されなくても、書くための素材を自ら探し

たり、選んだりできる書き手になってほしいと願います。
　この３つによって、**「言葉のもつ力そのものに語らせるような豊かな引用力をもった言葉の担い手」に近づける**のではないかと考えるわけです。

2.2 実践の主な柱

　実践の中核には「ものの見方を鍛える、想像力を耕す」というこだわりがあります。表現の「ノウハウ」以前に、「何を表現するのか」という内容がとても大切なのです。
　だからこそ、ものの見方、読み取り方という「読む領域」の力が、表現活動を支える柱になり得るのだと考えます。その柱の支えを原動力にし、人は、話したり書いたりする一歩を踏み出していけると思っています。そのためには、表現活動に必要な様々な素材に出会わせ、素材の可能性にふれさせたいと考えるわけです。では、実践の柱立てを整理してみましょう。

○　自分の生活に活かしたい言葉や心の琴線にふれるような言葉を引用し、感想や意見を書く活動
○　書く活動の前後に「話す・聞く」活動を入れることで、ものの見方を広げ、さらに豊かな書き手を目指す活動
○　書いたものを日常的に冊子化することで自分の考えを開示したり、読み合ったりする活動に慣れること
○　絵、写真、絵本、漫画、映画、人の言葉など、書くための様々な素材にたくさん出会わせます。そして、ものの見方、考え方、引用の仕方などを日々磨くように刺激を与え続けます。そのためには教師自身が書店に足を運ぶことや、美術館巡り、演奏活動なども含めて、つくり手としての感性、感覚の「自主トレ」を怠らないようにすることを心がけています。指導する立場の人間は、私を筆頭にして、人の「世話」を焼くことになれると、しばしば自己鍛錬への意識を忘れてしまいます。「言葉の力をつける」云々の前に、自身のそれはどうなっているのかを自問しなければならないと強く思う昨今です。「児童の実態」ならぬ、教師としての「私の実態」こそ、これからもっと問わなければならない大切な視点だと痛感しています。

3.日常的に書き続ける「年間帯単元」の開発

3.1 単元開発の構想

　光村図書の教科書に『学んだことを生かして』という単元があり

ます。本校のカリキュラムでは２２時間の大単元です。単元構想では次のようなことが一般的だと言えます。

（例）①『ごんぎつね』の学習と新美南吉さんの他の作品への読み広げ。

②『ごんぎつね』の学習の後、総合や学習発表会と関連させて人形劇化や作曲、演奏などの表現活動に発展。

①は、すでに『車の色は空の色』を活かして、「私の松井さん」というテーマで感想交流会を行っているので、同様な言語活動は避けたいです。②は、１１月の学芸大会と学習発表会で『化け猫になりたい』という劇を上演するので考え難いです。

単元構想の入り口
教師の迷い

〇週２回の全校朝読書。読書で出あった言葉を「引用」の材料として活かせそうです。
〇朝の帯タイムは、日常的に書いたり話し合ったりする言語活動には日程や時間的にも向いていません。
〇単元学習の内容と時間をどのように工夫して再構成するか？

そこで・・・

２２時間『ごんぎつね』の読み深めに８時間を費やし、後の１４時間を切り離し、独立させながら、**年間の帯単元として再構成**しようと考えました。

１４時間の単元構想への教師の願い

・　絵、写真、漫画の一コマ、人の言葉、読書や読み聞かせで出会った言葉などの多様な題材を通して、引用したり活かしたりしながら書く活動をさせたい。

・　書いたものを交流し、あるいは、書く前に感想交流し、

自分
と友達の違いや共通点に気づき、ものの見方を広げるような学びの姿勢を育てたい。

・　書く材料を選び、力強く豊かな言葉を引用しながら、言葉そのものに語らせるような、豊かな書き手に育てたい。

単元開発への教師の決意

この１４時間の活動を一年間の帯単元として捉えてみることにしました。

以上のような意識の流れから、年間の帯単元を構想するに至りました。その内容について以下のように簡単な表にまとめます。

3.2 日常的に書き続ける「年間帯単元計画」の骨子と学習活動

実施月	書く素材と学習活動	評　　価
４月 （２時間）	岡本太郎さんの言葉「壁は自分自身だ」 ・自分の生活経験などを事例にして、この言葉に感想や意見を寄せる。	短い言葉を手がかりにして、自分の生活経験などをそこに重ねて考えたことを書いている。
５月 （２時間）	ドラマ『ごくせん』の主人公の言葉「強さは力で決まるもんじゃない」	４月と同様
６月 （２時間）	漫画『メジャー』のワンシーンを読み、「このチームは、どんなチームなのかを想像し、評価し、自分のクラス（チーム）と重ねて」感想や意見を書く。	書いたことをもとに他者との共通点や違いに気づき、ものの見方を広げようとしている。
７月 （２時間）	写真家、川内倫子さんの１９作品を見て、作品に題名をつける⇒そして、なぜその題名をつけたかを書く⇒さらに、「マイベストワン」について書いたことをもとに対話する。	４月と同様
９月 （１時間）	絵本『エリカ』の読み聞かせを活かして、「大切にしたり引用し	必要なことをメモし、書く活動に活かそうと

	たりする言葉」をメモし、感想や意見を書く。⇒文集化	している。
１０月 （１時間）	心が励まされ、明日につながるような新聞記事を選び、大切に活かしたい言葉を引用しながら感想や意見を書く。⇒文集化	引用によって書くことの中心を意識しながら書いている。
１１月 （１時間）	１０月の文集を読み合って、引用し、活かしたい言葉をもとに対話したい内容の持ち主と交流する。さらに、そのことによってものの見方、考え方を広げたり深めたりする。	書いた文集を読み合い、自分と友達の違いや共通点があることに気づいている。
１２月 （２時間）	・朝の読み聞かせの時間に聞いた絵本『ともだちからともだちへ』の内容から、心に響いた言葉や大切にしたい言葉を選び、抜き出す。 ・選び、抜き出した言葉についての感想や意見を交流する。 ・交流した友達の考えと自分の考えの共通点や違いを意識し、自分の書く活動にとり入れようとしながら、感想や意見を書く。 ・「　」の使い方や既習漢字の使用などについて意識しながら、清書原稿を書く。(文集化)	必要なことをメモし、書く活動に活かそうとしている。 感想交流を通じて、友達と自分の共通点や違いに気づき、書く内容にとり入れようとしている。
２月 （１時間）	「卒業生に贈る短く力強い言葉」⇒四字熟語、諺、小説や物語、映画などの中の言葉を引用し、メッセージに込めた願いを書く。⇒文集化	